

巻 頭 言

小 松 秀 雄

1983(昭和58)年3月に『学院史料』が創刊されてから約30年間が経過し今回の号で26号になる。その間に昭和から平成へと元号が変わり、1995(平成7)年1月に阪神淡路大震災が発生し神戸女学院も多大の被害を被ったが、学院の関係者を中心とする広範な人々の懸命の復旧・復興活動により見事に立ち直った。そして、21世紀になって2011年3月11日には何百年に一度と言われる未曾有の規模の東日本大震災が発生し、東北地方を中心とする地域は地震の激しい揺れと大津波により甚大な被害を受けると同時に、福島第一原子力発電所の爆発事故に見舞われ、いまだに復旧・復興のめどが立っていない地域が多い。福島第一原発事故により日本の社会は生活や経済などの基盤となるエネルギー資源問題の見直しを迫られている。

神戸女学院創立150周年の節目に当たる2025年まで12年ほどであるが、これまで25号を数える『学院史料』をふり返ると、ブラウン女史やソール女史の書簡、『めぐみ』人名索引、史料室の記事や所蔵文書目録などが定期的に掲載されてきた。また、歴代の院長と史料室長が巻頭の文章を寄せられている。ここでは、今後の史料室のあり方を考えるために、いくつかの巻頭の文言を取り上げてみたい。

まず創刊号では当時の岡本道雄院長が「『学院史料』創刊によせて」において次のような冒頭の文章を書かれている。「『学院史料』と名づけられる神戸女学院史料室の機関誌が発行されることになった。神戸女学院が一九七五年に創立百周年を迎え、「総説」、「各論」二冊からなる『神戸女学院百年史』を発行

したのであったが、今回のこの機関誌の発行は、次の『百五十年史』、『二百年史』のためのものである^①。1990年3月刊行の『学院史料』第8号では山内祥史史料室長が巻頭の「史料室を担当するに際して」において、1970年から始まった学院百年史等の史料整備の仕事、1972年における史料室の設置、1989年における史料室委員会での「神戸女学院史料室規程(案)」の作成と部長会での決定、それに基づく史料室専門委員会と史料室運営委員会の設置等の組織の整備過程に言及されている^②。

さらに、2005年10月刊行の『学院史料』第20号では、松澤員子前院長が「神の偉大なみ業に感謝して」において神戸女学院の創立時のタルカット女史とダッドレー女史の宣教活動を思い起こしつつ、大学を取り巻く現代の厳しい環境に立ち向かう大切な拠り所を2人の女史の活動に求めている^③。同じ号の「『学院史料』第二〇号によせて」においては浜下昌宏図書館(史料室)長が「二〇〇五年度より史料室は大学図書館の一部として運営されることになった。それを学院の組織再編としてたんに受け入れるだけでなく、この再編を転機かつ好機として、図書館とも関連する史料室の業務内容もいくぶん見直してみたい^④」と述べられている。その言葉は大学の通常の一般図書と学院の文書・記録(アーカイヴズ)との関連を再考することにもつながる。

本学院の史料室は「史料室規程」に則り学院の多種多様な文書・記録(アーカイヴズ)を収集、整理、保管し、機関誌等の印刷物を刊行したり関連事業を実施しながら学内外に向けて幅広く情報提供してきた。1996年4月に設立された全国大学史資料協議会とも連携しながら本学院の史料室は、たゆまず堅実な活動を続けてきており、全国レベルの史資料協議会でも非常に高い評価を得ている。2005年3月に退職された若山晴子さん、現在の佐伯裕加恵さんや富岡ひとみさんをはじめとする史料室の代々のスタッフの献身的な努力の賜物である。現代は高度情報化と電子メディアが急速に進展している時代であり、既存の紙媒体中心の大学アーカイヴズに関しても新たな対応が求められている。2025年には神戸女学院創立150周年を迎えるが、記念すべき『神戸女学院百五十年史』の編纂事業に向けて史料室は今後も堅実であると同時に、社会の変化を見極め

つつ臨機応変に活動が続けていかなければならない。前年の『学院史料』第25号で現在の森 孝一院長が「神戸女学院史研究の進展をめざして」の巻頭文^⑤において提言されている内容を改めて心に刻んで前進していきたいものである。

註

- ① 『学院史料』 第1号(1983年)、1ページ。
- ② 『学院史料』 第8号(1990年)、1-4ページ。
- ③ 『学院史料』 第20号(2005年)、1-2ページ。
- ④ 同上、5ページ。
- ⑤ 『学院史料』 第25号(2011年)、1-2ページ。

(大学図書館(史料室)長)